

基盤教育におけるアクティブ・ラーニングの試み —「身体表現入門」の場合—

東 田 充 司

Practical Report on Active Learning in the Liberal Arts Education: In the Case of “Introduction to Physical Expression”

Atsushi HIGASHIDA

【キーワード】 アクティブ・ラーニング、STEAM 教育、コミュニケーション能力、表現教育

1. はじめに

追手門学院大学では、これまでの共通教育をリベラルアーツ教育の観点から再構築し、新たな総合的教養教育、追大型リベラルアーツ教育の確立と実践を目指すことを目的として2013年4月に基盤教育機構が発足した。各学部から独立した機構としての利点を最大限に活かし、学部に関わらず必要とされる基礎的な能力・技能を育成するための大学教育の基盤としての役割を担うことが目的である。

この追大型リベラルアーツ教育をさらに推進すべく2015年10月から基盤教育科目のカリキュラム設計を見直すこととし、2019年4月から新カリキュラムによる授業を開始した。新たな人材養成目的に「市民として生涯にわたって自己を形成し続ける活動の基礎を養成する」ことが明記され、この目的にそってディプロマポリシー（学修成果）と対応する科目群が設計・編成されている。編成の柱となる科目群はファウンデーション科目、リベラルアーツ・サイエンス科目、主体的学び科目の3科目群から構成される。

新カリキュラムで新規開設された「身体表現入門」は、リベラルアーツ・サイエンス科目群に属する。この科目群で期待されるディプロマ・ポリシーは、「(1) 人と社会と自然の複雑なかかわりを学際的視点で理解し、現代社会の価値観の多様性と広がりについて学びを深める、(2) 学問の多角的なもの見方と捉え方、および学び方の多彩な方法論に出会い生活に生かす経験を積む」と明記され、これに対応する下位区分には、「人文・社会」、「芸術・文化・身体」、「自然」が配置されている。「身体表現入門」は学際的視点により展開し、「芸術・文化・身体」の

下に位置づけられる。

本稿では、2019年4月に新設された茨木総持寺キャンパスの施設を活用し、所属する学部を超えての「学び合い、教え合い」を生かした「身体表現入門」での取り組みを報告する。ここに大方のご批評をお願いする次第である。

2. 当初の授業構想

「身体表現入門」では、構想当初より座学を中心とする講義形式と、実技を中心とする演習形式の双方の良さを兼ね備えた、新たな授業展開を目指した。

少しでも演劇やダンスを経験したことのある、身体表現に意欲溢れる受講生を集めての授業展開は、リベラルアーツ教育の授業科目として一般的に考えやすい。ここでは体操服に着替えた上で、体育館での少人数制の授業が考えられる。身体表現とはそもそも実技を伴うものであり、好きでやりたい受講生のみを集めるからこそ授業が成立する少人数制の演習科目である。しかしながら基盤教育科目として、少なくとも100名程度の受講希望者に対応することが出来なければ、その役割を果たせないこともまた現実である。とはいえ、単なる身体表現理論のみの講義だけでは、「芸術・文化・身体」の融合科目のコアとして果たすべき基盤教育とはなり得ない。

幸いなことに、本学の社会学部には社会文化デザインコースがあり、身体表現論や演劇論、演劇・ダンス演習をはじめとする学びの場が用意されている。このコースを目指す社会学部の初年次学生は、演劇やダンスの経験があるなり、興味や意欲に溢れているであろう。これらの学生を中核として、少人数のグループワークを基軸として授業運営を行うことを想定した。これが、主体的・対話的で深い学びを実現するアクティブ・ラーニングを全面的に導入する経緯である。身体表現には馴染みがなく、演劇やダンスとは無縁の高等学校生活を過ごしてきた初年次生を中心にし、実技を前提とした新たな本学での授業形式を目指した。

3. 事前調査

新カリキュラム実施前年の2018年6月に、学部生を対象に新科目「身体表現入門」受講希望についてのアンケート調査を実施した。おおよそどの程度の割合の学生が、この授業のリーダーになれるのかを知ることが主目的である。

アンケートは、筆者が担当していた講義科目で行った。「現代の子どもと教育」は、約半数を1年次生が占め、「教職概論」は1年次対象科目であり、8割以上を1年次生が占める。「現代の子どもと教育」の受講生の中で「教職概論」履修生は3名のみであった。教員志願学生と

そうでない学生の意識の差異を確認し、「身体表現入門」を受講した際のリーダー性の可能性を確かめる意味もあった。

表 1. 受講希望者数事前調査

調査授業名	受講する	分からない	受講しない
現代の子どもと教育	13 (12.4%)	49 (46.7%)	43 (41.0%)
教職概論	13 (10.6%)	52 (42.3%)	58 (47.2%)
計	26 (11.4%)	101 (44.3%)	101 (44.3%)

注：「現代の子どもと教育」は基盤科目、「教職概論」は教職必修科目

「受講する」が1割強、「分からない」と「受講しない」がそれぞれ同数の45%弱の結果となった。教職希望者が母集団の「教職概論」が、教職希望者でない「現代の子どもと教育」を僅かながら下回る結果となった。自由記述からは、「分からない」と回答した中で、必ずしも受講には肯定的でない記載が少なからずあった。またそこでは、自身のコミュニケーション能力の向上を願う記述が多くを占めた。代表的なものは以下の通りである。

- ・人前でも緊張せず、自信を持って発言できる力をつけたい。
- ・就職活動で有利になる発言力を身に付けたい。
- ・興味はあるが、自分に出来るのか不安である。
- ・恥ずかしくて、とても出来ない。
- ・客観的に授業を見たいと思うが、自分が参加することは不可能である。
- ・どんな場面でも、堂々と立ち振る舞いが出来ればと思うものの、それは理想でしかない。
- ・やりたい気持ちはあるが、不安が大きい。この授業をとってみようと勇気を与えてくれるようなことを、シラバスに書いてほしい。
- ・「コミュ障」と呼ばれる人に自分も当てはまるかもしれない。コミュニケーションを取るのが楽しいと思えるような授業になってくれれば嬉しい。

それぞれの科目の受講生には、社会学部に所属し社会文化デザインコースを目指す学生をはじめ、演劇系クラブやサークル等に所属する学生が存在した。いずれの授業でも毎時間グループワークを行ったが、活発な話し合いを牽引する役割を果たしている場面を多く見ていた。「受講する」と希望した学生は、授業開設時には積極的に授業に取り組み、仲間をまとめていく存在であるだろう。

近年、大学に求められる最大の課題のひとつが、コミュニケーション能力不足への対応である。日本経済団体連合会が1997年より実施している「新卒採用に関するアンケート調査結果⁽¹⁾」によれば、「選考にあたって特に重視した点」の項目で、2004年から2019年まで16年

連続で「コミュニケーション能力」が1位となっている。大学と社会との繋がりの中で、コミュニケーション能力を目指した総合実践力を身に付けさせることは急務である。様々な表現の実習を通して、社会人として求められるコミュニケーション能力の育成を可能とする「身体表現入門」の果たすべき役割は大きいと思われる。

今回のアンケート結果を受けて、グループワークにより実践する内容として、狭義の身体表現に加え、音声表現を活動に付加することとした。15回の授業により得られる具体的な到達目標に「コミュニケーション能力」向上への求めに応える目的である。ただ、一般的に身体表現に比べて音声表現は個人差が極めて大きい。前半を身体表現として実習を行い、人前で表現活動する経験を自信とし、後半で音声表現に挑戦することにした。グループワークが可能な音声表現の題材として、筆者が前職の小学校教員時代に取り組んできた、大型絵本の読み聞かせを導入することを決め、基盤教育機構として40冊の蔵書を整備した。

4. 身体表現入門の開設

春学期に2クラス開設する授業開始にあたっての最大の懸念は、果たして受講者が集まるのかという一点にあった。事前調査での受講希望を受け、基盤教育機構内でも、数年かけて受講学生を増やす努力をするしかないという意見すらあった。しかし、結果的には想定を超える履修登録者が集まった。

表2. 身体表現入門学年別受講者数

クラス	4年次	3年次	2年次	1年次	合計
A (月曜3限)	10 (9.8%)	12 (11.8%)	31 (30.4%)	49 (48.0%)	102
B (金曜3限)	9 (5.0%)	25 (13.8%)	29 (16.0%)	117 (65.2%)	180
合計	19 (6.7%)	37 (13.1%)	60 (21.2%)	166 (59.0%)	282

この背景のひとつには、新キャンパスに設置された教室規模が挙げられる。本年度より1年次生が学ぶ茨木総持寺キャンパスには、大教室は設けず最大200名程度までの中教室までしか設けていない。このため、履修を希望しながらも、やむなく教室規模を唯一の理由に無作為抽選により履修を決定する科目が、一部ではあるものの生じた。大教室による一斉講義を脱し、少しでも少ない人数での基盤教育科目を提供するという構想によるものであり、望ましい措置である。ただ、より受講したかった授業科目ではなく、第2希望でこの授業を履修するようになった受講生が少数ではあるものの存在することになった。さらに、実技中心のこの授業では、教

室収容人数一杯の受講者にすべきではないという教務課の配慮により、180名が受講者数の上限とされた。

また、2年次以上の受講生の占める割合が、比較的多い結果となった。1年次生はA組では約半数、B組では6割強であり、想定とは異なる占有率であった。当初より学年別にグループ分けを行う計画であったので、何等の支障はなかった。全面的にアクティブ・ラーニングを導入した実技中心のこの授業は、一貫して落ち着いた雰囲気で行えたが、多くの上級生の存在が遠因にあったと判断している。

活動単位であるグループの人数は、6人を基準とした。前年度の授業運営の経験則の中で、効果的な活動単位の最大値による。同学年の中で男女比を勘案しながらも出来るだけ多くの所属学部が混在する様に、初回授業時に公開無作為抽選を行い、A組17班、B組30班編成とした。

90分授業を、20分講義・50分グループワーク・20分振り返りとし、授業前のリーダー集会により、その日の実技内容を周知した。サブリーダーには日々活動報告書を書かせ、振り返りには毎回ミニッツペーパー記入を課した。

グループワークの活動場所は、全面ガラス張りの校舎を取り囲む屋外を最大限に活用することにした。さらに、鏡張り仕様のエレベーターホール壁面15か所と、1階中央に位置する巨大な公開空間（WILホール）を併用した。屋外空間での活動は開放的であり、グループ間相互が自由に見合える雰囲気創りに効果がある。さらに、キャンパス内の教職員や学生から常に見られる環境での学びは、見せる立場での意識を創る観点からも望ましい。住宅地に位置する茨木総持寺キャンパスは、誰でも利用できる食堂をはじめとして、地域に開かれた設計である。授業に合わせて、近隣にお住まいの方々が見学に来られるという場面も見られた。

5. パントマイムによる身体表現

15回の授業を基礎ワーク3回、身体表現ワーク6回、音声表現ワーク6回とし、身体表現終了時にグループ編成を変えた。身体表現と音声表現の最終回には成果発表を行い、受講生以外にも広く公開した。この順序で活動を行った背景には、個人による到達度の差異が身体表現の方が出にくいという教育的配慮がある。受講生による相互評価を実施したが、身体表現はグループ単位で、音声表現は個人単位という配慮を前提とした。また、涼しくて活動がし易いうちに身体表現を実施したいという観点もあった。

最初3回の授業で、授業オリエンテーションと仲間づくり基礎ワークを行った。見ず知らずの他学部学生との活動には、少なからず抵抗を感じた場合もあった。実際に受講生個人の口から困難さを訴える場面は多くなかったが、サブリーダーによる活動記録にはグループ内解決を目指すべく奮闘ぶりが数多く報告されていた。屋外による活動では、当初グループ間での取り

組みに対する積極性の差が激しく、必ずしも円滑には始まらなかった。しかし、周囲の活動が可視化された屋外環境で、皆が同じ活動をしようとする雰囲気が醸成されたことにも助けられて、徐々にではあったが、全ての班が主体的なグループワークを展開することが出来るようになった。

2週目の縄を使わない大縄跳びを経て、グループで輪になって一斉に無言で立ち上がるオールスタンドアップを3週目に行った。ここで初めて身体接触を伴うワークに至ったが、すべてのグループが意欲的に取り組むことが出来た。いずれのクラスもリーダー集会でオールスタンドアップをやりたいという自主的な提案があり、この声を受講生主体の意識を前向きに進める結果となった。



図1 最初のグループワーク

4週目から、パントマイムの実習を行った。

ワーク課題として「壁」を採り上げ、成果グループ発表でも「壁」をテーマに1分程度の創作作品を課した。ここでもリーダー集会を最大限に活用し、技術指導をリーダーに伝授し、グループワークで学び合う手法を活用した。ここでは、代表的な動画サイトを紹介するほか、パソコンで自分たちのワークを動画撮影して確認する方法を推奨した。また、本年度の1年次学生より、全員がノートパソコン必携となり、インターネット動画サイトを各自が自由に視聴することが出来る環境となった。全面ガラス張りの教室には自分たちの動きがある程度映り込むものの、教室内からはロールスクリーンがあるので特段気にならない。15か所あるエレベーターホールの壁面鏡も使いながら、少しずつではあるが、この授業では自分たちは演じる立場にあるという意識が養われていった。

成果発表には、相互評価(グループ単位で技術と協力を評価)を採り入れたが、完成度の高い作品に対しては高い評価が集まった。従来の表現手法に拘らない独自性の強い作品も見受けられ、指導者としての新たな可能性への発見もあった。公开发表では、ガラス張りの1階教室の外で発表している様子を室内側から観ることにしたが、発表者の緊張感の緩和効果が見られた。専門スタッフによるビデオカメラを入れ、学長をはじめとする学内



図2 パントマイムの創作

外の参観者の眼前での発表で得られた自信は大きかったことが、活動記録により確認出来た。相互評価観点である技術と協力は、自分たちの発表観点として自認を促すことにも繋がったと思われる。

6. 大形絵本による音声表現

10週目からのグループ変更では、引き続き同学年での6人編成とした。受講生の求めた編成への意見でも、同学年での活動を求める声が多かった。また、高い参加意識を持った受講生同士で組みたいとの意見もあったが、結果的に指導者による無作為抽選によるものとした。編成グループ数は、改変前と同じA組17班、B組30班編成とした。

絵本の選定は、あらかじめ用意していた40冊より30冊を指導者側で選定し、抽選により担当を決定した。

〔選定した大形絵本〕

だるまちゃんとかみなりちゃん、グレート・ワンダーシップへようこそ！、ぐりとぐら、ちか100かいだてのいえ、100かいだてのいえ、くまのコールテンくん、まどからおくりもの、せんろはつづく、月ようびはなにたべる？、にじいろのさかな、はらぺこあおむし、からすのパンやさん、しりとりのだいすきなおうさま、よかったねネッドくん、なつのいちにち、ふしぎなキャンディーやさん、へんしんオバケ、へんしんトンネル、もりのかくれんぼう、ぐりとぐらのおきゃくさま、すてきな三にんぐみ、どうぞのいす、ともだちや、もったいないばあさん、ダンゴムシみつけたよ、おばけのバーバパパ、でんしゃにのって、はじめてのおつかい、めっきらもっきらどおんどん、とべバッタ

グループ毎に音読台本を作成した上で、群読の手法を生かした役割分担を決定し、グループワークを進めた。1階教室の他に、巨大な公開空間（WILホール）を練習場所としたが、日陰の屋外を選ぶグループも少なくなかった。音読台本によって各自の個人練習が可能になり、暗唱を試みるグループも見られた。

グループワークに先立つ20分の講義では、読み聞かせを行う相手に対する意識を持つことを第一義に指導した。聞かせる相手が十分に認識できるだけの声量とテンポや間のありかたを実演し、「学び合い、教え合い」だけ



図3 大形絵本でのワーク

では不十分な指導は、指導者が巡回して個別に助言を行った。既習経験による各自の力量差は、少なくなかったが、予想通りではあった。仲間の手本となる水準の受講生がいないグループもあり、2グループをペアチームとして組織して補完した。受講生相互のグループワークの活性化には、技術面でのリーダーの存在は不可欠である。今回はこのことを全く加味せずグループ編成を行ったが、今後に向けての大きな課題である。

7. 結果分析と今後の課題

最終授業時に、効果検証を目的としてアンケートを実施し、249名より回答を得た。表現実践力としてのコミュニケーション能力の向上について、8割が「向上」と「かなり」に回答し一定の効果の達成を確認した。また、グループワークへの積極的参加についても、8割が「なった」と「かなり」に回答し、ここでも効果の達成がある程度確かめられた。

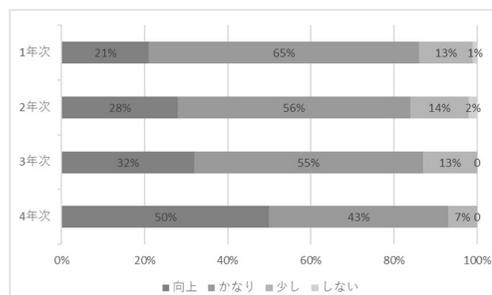


図4 事後調査(1)
コミュニケーション力が向上した

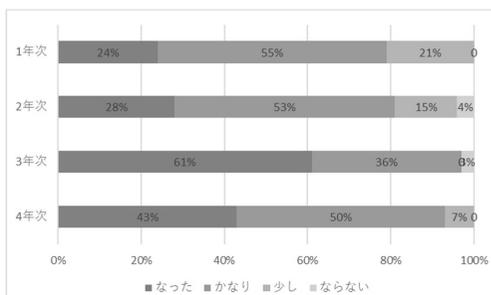


図5 事後調査(2)
グループワークに積極的になった

特徴的であったのは、いずれも上学年の達成レベルが1～2年次学生より高いことである。授業への取り組みを観察していても、熱意や集中力が高いだろうとは感じていたが、今年度の受講生に限ったものかどうかは分からない。ただ、就職活動により敏感であったという背景は影響していると思われる。以下、自由記述より受講生の主な感想を挙げる。

- ・毎回の授業のポイントは具体的で実践しやすく、他の授業の発表でも生かした。この授業で僕は変わることができた。(1年次)
- ・人前で話す時に視線を意識し、伝えるためのパフォーマンスが出来るようになった。(2年次)
- ・毎回緊張し、最初は無理かと思った。しかし、グループ皆が緊張している中で声を掛け合い、最終的には自分に自信が持てる様になった。(3年次)
- ・留年して5年目。4回生との班で、初めは敬語が使われた。グループワークのチーム力が向上し、学年差は関係ないと全員が気付けた。(4年次)

また、集団で取り組む課題発表を通じ、知識を繋ぎながら共に学んで一緒に議論し、すべてのグループが創作作品を創出した。可視化された練習過程や発表時の相互評価を通じてグループ毎に独自性を追求し、デザイン思考の形成を指導者として発見したことは、望外の喜びであった。効果の検証を今後の課題としたい。



図6 パントマイム発表風景⁽²⁾

引用文献

- (1) 日本経済団体連合会：2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果 p2
file:///C:/Users/user/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/TXZSKPK9/110%20(1).pdf (2019年11月29日アクセス)
- (2) YouTube:
<https://www.youtube.com/watch?v=jx4ysf0JdiU> (2019年11月29日アクセス)

参考文献

- 古賀崇朗、青柳達也、河道威、米満潔、角和博、穂屋茂：『初年次教育におけるアクティブ・ラーニングの試み —「身体表現入門」の場合—』佐賀大学全学教育機構紀要、第2号、佐賀大学全学教育機構、pp83-90 (2014)
- 平田オリザ：『演劇入門』、講談社 (1998)